

近代思想とアフリカ認識

ヘーゲルの『歴史哲学』の批判的考察を中心に

The Tendency of Modern Thought and the Perception of Africa

文学研究科社会学専攻博士後期課程在学

野 津 志 乃

Shino Notsu

はじめに

- 1．日本人のアフリカ認識とその研究
- 2．前近代のアフリカ像
 - 2．1 ギリシア・ローマ世界とアフリカ
 - 2．2 中世の野蛮観
 - 2．3 ルネッサンス後半
- 3．ヨーロッパ近代の野蛮観
 - 3．1 比較によるヨーロッパの再構築 = ヨーロッパの優位性の確立
 - 3．2 キリスト教による黒人の認識
 - 3．3 18世紀後半の「黒い肌」への認識
- 4．ヘーゲルにアフリカ認識
 - 4．1 ヘーゲルによるアフリカの分類
 - 4．2 ヘーゲルによるアフリカ人の特徴
 - 4．3 社会進化論とアフリカ

おわりに

はじめに

アフリカ大陸にいったことのない日本人にとってアフリカは、未だ遠い世界なのだろうか。著者は2001年5月から1年弱アフリカ大陸ギニア湾岸沿いのガーナ共和国に滞在していた。帰国後、現地での生活について尋ねられることがある。つい先日ある友人からも同様の質問をされガーナについて語った。すると友人は「アフリカ人はより動物的」と口にした。私にはその発言が衝撃的であった。それは特異な例と言えるかもしれないが、日本人の中に「アフリカ人 = より自然、動物的、野蛮」という見方が蔓延しているのではないだろうか。それは一体なぜだろうか。本稿では日本人のアフリカ観

に対する先行研究を整理し、それに影響を与えたとされるヨーロッパの思想家のひとりであるヘーゲルを中心に、近代の西洋人がアフリカをどのように認識していたのかを検証していく。

1. 日本人のアフリカ認識とその研究

アフリカが独立を勝ち取った1960年の新聞記事に「独立直前のコンゴ」という表題で次のような記事が掲載された。

コンゴは、アフリカの中でも最もアフリカ的な国である。美人のラベルを貼った缶詰を見て『この缶の中には、この女の肉が入っているのか』と聞いた黒人がいた。カトリックの小学校に、太った大司教が視察に来たら、黒人の父兄が「おいしそうな子供を捜しに来た」と言って、子供を学校にやらなくなった。マネキン人形を満載したトラックを見た黒人が「白人はこんなたくさんの人間を食らうのか」と恐がった。・・・こんな話が、今でもごろごろこぼれている。黒人達にしてみれば、おじいさんの時代までは、人間の体を食べていたのだから無理もない。・・・(中略)・・・こういう黒人達が突然主権者になるのだから大変だ。

ここには、当時の日本人が黒人を同じ種類の人間とは見ておらず、野蛮な、未開な人種というイメージを持っていたことが伺える。世論に大きな影響を与える新聞にこのような内容が堂々と書かれているのであるから、この当時の日本人のアフリカに対する認識がいかなるものか推察できる。これは1960年当時のことである。日本人はいつアフリカ大陸の存在を知り、どのようにアフリカを認識していたのだろうか。また、そのアフリカ認識はどのように変化してきたのだろうか。これらの問題は本稿の主題ではないが、ここで日本人のアフリカ認識についてどのような研究がされてきたのか整理しておきたい。

日本人のアフリカ認識やその変遷を研究した著作はいくつかある。初期の著書に1983年に出版された『西欧・アフリカ・日本^①』がある。これは大阪日仏センターで行われた、アフリカに関する公開講座を採録したものである。日仏センター主催した公開講座であるだけにフランス語圏アフリカに関する問題が多く盛り込まれている点が興味深い。また、口座向けに前半はアフリカと奴隷の多く渡ったカリブ海域の文学を主題に論じ、後半は日本人のアフリカ認識を論じ問題提起している。日本人のアフリカ認識を研究したものとしては、岡倉登志と北川勝彦の『日本 アフリカ交流史 明治期から第二次世界大戦期まで』(1993年)と川端正久が編集した『アフリカと日本』(1994年)がある。前者は日本初の日本 アフリカ交流史であると同時に日本人のアフリカ認識を論じた初めての著作であるといえよう。後著は龍谷大学の社会科学研究所による共同研究をもとにされた著作である。川端が前書きで述べているようにアフリカ・日本関係を総合的・多角的に論じた本格的共同研究として大変意

義があるものである。ここでは青木澄夫が「明治時代のアフリカ像⁽ⁱⁱⁱ⁾」を文学作品に表れたアフリカ認識を中心に論じている。また、戸田真紀子が「日本人のもつアフリカのイメージ^(iv)」を大学生のもつアフリカ認識を、辻本卓嗣が「日本の新聞に見るアフリカ報道^(v)」を論じている。

岡倉はまた『「野蛮」の発見 西欧近代のみたアフリカ』(1990年)でリンネを嚆矢とする人類の階層化やルソーを中心とした逆ユートピアとしての「野蛮」への憧れを論じ、西欧近代は、外部世界＝「野蛮」の発見によって成立したと述べている。そして、ルソー、サド、宣教師、探険家らの思想を追いながら、歪められたアフリカ像と黒人差別の根源を探っている^(vi)。また、上原専禄は現代認識の問題性を論じアジア・アフリカ研究の問題点、世界史認識の作業方法・世界史研究の方法を求めて、アフリカ認識や世界史像における「東洋」と「西洋」などを述べている^(vii)。

実際に日本人がアフリカ大陸から来た人と出会ったのはいつが最初なのであろうか。明治時代、大正時代の日本人とアフリカ人の出会いを掘り下げている著作に青木澄夫の『日本人のアフリカ「発見」^(viii)』がある。青木はアフリカ大陸からアフリカ人が日本にはじめてやってきたのは、南蛮貿易が始まった16世紀半ばのことだとしている。鉄砲が日本に伝来した5年後の1548年(天文17年)、ポルトガル人の船長が、フランシスコ・ザビエルに宛てた手紙の中で「日本人は黒人、とくにモザンビークからきたカフィヤ人を見ることを喜んで…」などと書いているという。また、戦国時代の織田信長の人生を記録した『信長公紀』には1581年(天正9年)2月23日にイエズス会の巡察使ヴァリニャーノに随行していたアフリカ人が、信長に謁見したとある。日本の文献史上では、これがアフリカ人についての最初の記録であるという。信長はこの黒人に差別的な感情は抱けなかったという^(ix)。明治から第二次世界大戦末までにかけて日本は多くの知識を西洋から輸入したが、その中にアフリカに関する情報もあった。徳川慶喜の孫に当たる蜂須賀正氏が自然科学なかんずく鳥の研究を志し西洋に留学し、アフリカの地に渡ったことを青木は描き出している。また探検家、商人、外交官、旅芸人としてアフリカにわたったものがいた。このように幕末から明治期以降、西洋を通してアフリカの情報を日本人が得ていたのは明らかである。

西洋のアフリカ認識を詳しく論じているのは岡倉登志である。岡倉は「日本人のアフリカ観あるいは人種観に見られる特徴の一つとして、日本人が西欧近代社会の『知』を輸入していることを指摘できる^(x)」と述べているが、明治時代以降日本は西洋から近代科学や政治体制だけでなく文学や哲学をも輸入してきた。アフリカ大陸の人や自然についての情報も西洋を通して明治の日本に伝わってきた。岡倉はこのように西洋から取り入れたアフリカに対する認識を「19世紀のヨーロッパ人が『完成』させ、日本に輸入されたアフリカの虚像^(xi)」と述べている。福沢諭吉が1875年に発表した『文明論之概略』のなかにアフリカ論が登場し「野蛮の国」として位置づけられているが、福沢が西洋の書物を読み影響を受けてアフリカを認識したためだであろう。果たして福沢らが西洋から学んだアフリカとはいかなるものだったのだろうか。18世紀、19世紀の西洋諸国の思想の中に現れる「アフリカ観」とはいかなるものであったのだろうか。

2．前近代のアフリカ像

2．1 ギリシア・ローマ世界とアフリカ

まず、近代に至るまでの西洋のアフリカ観を簡単に見ていきたい。ギリシア・ローマ時代に遡ってみると、ギリシア人は地中海・黒海・カスピ海から北の部分をヨーロッパ、それより南をアジアとして捉え、現在のアフリカ大陸の北東部エジプトあたりはアジアの一部であるとし「リビア」と呼んでいたらしい^(xii)。「アフリカ」という言葉を使い出したのは、ローマ人のようである。ここで現在のアジア、アフリカ、ヨーロッパという言葉が出揃った。聖書においてアフリカはエチオピアの彼方にある「翼でかげる土地」として描かれている。「エチオピア」はギリシア語の「イティオプス」(黒い人、日焼けした人)に由来に由来するといわれているが、太陽神ゼウスの異名も「イティオプス」であり、肌の黒い人に対して差別する意識がこの当時はなかったことが伺える。

2．2 中世の野蛮観

中世はヨーロッパ人とアフリカの出会いはほとんどない。中世の野蛮観について岡倉は「ヨーロッパ中世において古代以来の野蛮という観念がキリスト教信仰という新しい宗教と融合して『キリスト教徒でないものは野蛮人である』ということになった。これがヨーロッパ近代人の野蛮観における一つの伝統となり、言いかえれば、物心ついたときには、この観念がすでにみについていたのである^(xiii)」と述べている。

ヨーロッパ人であると自覚し、アジア人とアフリカ人と区別し「エウロパエウス^(xiv)」という言葉を使ったのは15世紀のエラスムスである。エウロパネスはキリスト教の信仰に基づく共同体のことである。

2．3 ルネッサンス後半

この時期は、大西洋側西アフリカ地域での奴隷貿易の開始期にあたる。1444年、アフリカから黒人が奴隷として直接ポルトガルに連行されるが、航海王子として名高いエンリケ(1394～1460)によって保護されていた。奴隷労働の使用にどのように論理性が与えられたのだろうか。黒人に洗礼を施して魂の救済を与えることの代償であり罪深くないと考えられた。16世紀には、三角貿易に際して黒人は生まれつき奴隷人種であるという主張がなされた。

ヴィクトリア朝作家トロロープは次のように述べている。

「黒人は身体的にきわめて過重な肉体労働も可能であり、他のいかなる人種と比べても肉体的に苦痛を感じる度合いは少ないと思われる。」

ここでは、奴隷制を正当化するため黒人の野蛮性が強調されているように思われる。「黒人＝裸の野蛮人」との認識の原点といえるだろう。『ジャマイカ史』を書いたエドワード・ロング（『ジャマイカ史』1774年）は「黒人は人類ではない」、「黒人と白人よりも、オラウータンと黒人の方がはるかに似ている」とさえ述べているのである。

エチオピアの語源からギリシア時代の黒の意味は決して悪いものではなかったことに述べたが、ヨーロッパ語における「黒」の意味はどのように変化していったのだろうか。葬式で黒を着用する習慣は古代ローマにすでに存在していたらしい。古英語Bleacや古高地ドイツ語Blahはラテン語の燃えることから「燃えた、黒くこげた」という意味があり、「灼熱＝黒」であるらしい。英語のNegroの類語 Necros には屍の意味がある。黒い肌への嫌悪・蔑みは古くからあったそうだが、中世まではそれほど根強いものではなかったともいう。例えば、マルコ・ポーロは『東方見聞録』で白人優越を語ってはいない。

3．ヨーロッパ近代の野蛮観

3．1 比較によるヨーロッパの再構築＝ヨーロッパの優位性の確立

アントニオ・ネグリは『帝国』においてヨーロッパ近代の国民国家（the nation-stat）とそれに付随するイデオロギー構造をその領域の内部ではあくまでも人民の純粋さを創出し再生産しようとするものであり、外部においては＜他者＞を生み出し、人種的差異を作り出し、主権の近代的主体を確定し維持する境界を立ち上げる機械だと指摘している。それは完全なる境界線ではなく双方向の流れの調整に役立つものであると述べてはいるが、東洋人、アフリカ人、アメリカ先住民はいずれも、ヨーロッパ人のアイデンティティと近代的な主権がで上がるために必要とされるネガティブな構成要素であるとしている^(xiv)。つまり、ヨーロッパが近代の国民国家を作り上げるために、自らの外に他者を必要とした。アフリカは西欧にとってなくてはならない存在であった。それは西欧人が自らを構築するため他者と区別して自らを確立するといった精神的な面だけでなく、経済的に西欧を支えており、西欧にとってなくてはならない存在であった。

フランクは15世紀から18世紀半ばまで世界の経済的中心はアジア（特に中国）であったことを描き出しているが、その期間、西欧特にイギリスは、とりわけインドや中国に対して、ほとんど競争することが不可能であったということを文献を中心に描き出している^(xv)。ヨーロッパは依然として、綿織物をインドに、陶磁器を中国に依存しており、ヨーロッパは、それを、アフリカやアメリカ大陸の植民地に再輸出して、利益を得ていたのである。支払いに必要な貨幣をアフリカとアメリカの植民地に依存していたのであった^(xvi)。そのため、西欧はアフリカを手放すことができず、西欧諸国がアフリカを我が物とし続ける正統な理由が必要となってくる。

岡倉は「奴隷貿易が密度が濃くなり、在英黒人問題が社会問題となりはじめる18世紀後半＝近代の

開始期には、ヨーロッパ諸国は再びアフリカについて具体的な知識を求め始めた。それとともに、ヨーロッパの世界征服 = 植民地支配を正当化・合理化するイデオロギー（観念）が系統化されはじめる^(xviii)」としている。自由と平等を求めるヨーロッパの市民社会は、不自由で不平等なアフリカ人奴隷を必要としていた。この一見、相矛盾する現実を解決するために、アフリカ人を徹底的に文明から遠ざける言説を作り出された。アフリカ人は自分たちと同じ人間ではない、とすれば差別も正当化できるというわけだ。アフリカ = 野蛮の言説は、このとき発明されたと言ってよい^(xviii)。そのイデオロギーは社会進化論、文明開化論、キリスト教と相互に絡み合いながら作り出された。

3.2 キリスト教による黒人の認識

キリスト教は植民地支配や西洋以外の人びとをどのように認識していたのだろうか。16世紀、カソリックの司教であり宣教師であったバルトロメ・デ・ラス・カサス^(xix)はインディオの人間性を主張し、スペイン人支配者の残虐さに抗議することができた。「人類はひとつにして平等である」という思想からである。それは宣教の使命が密接に関わっていた。インディオがヨーロッパ人と本質的に同等であるのは、彼らが潜在的にヨーロッパ人であり、実のところ、潜在的にキリスト教徒であるからであり、インディオは最高度の寛容さと慈悲によって、真の宗教やその文化の支配と保護のもとに導かれるだろうという、ヨーロッパ中心主義的な見方をラス・カサスは超えることができない。

18世紀までは「選民思想」「予定説」により「野蛮な黒人は神より白人の奴隷になる運命を定められた」「怠惰な本性を持つ黒人には労働の強要が必要」などと考えられた。19世紀以降は「文明論」に依拠し、奴隷貿易廃止キャンペーンを推進する。「劣った野蛮・未開状態にある人種を、優れた白人がキリスト教的人道愛によって文明世界に引き上げる」というヨーロッパ帝国主義列強の植民地化政策をバックアップするようになる。

3.3 18世紀後半の「黒い肌」への認識

18世紀後半には博物学・生理学的道德学の「進歩」による差別の論理化が行われる。シェークスピアの『オセロ』の中でオセロ（ムーア人 = 黒人）の白人にはない残虐性の描写されている。岡倉は「白人と黒人を美 = 徳 = 快 VS 醜 = 悪徳 = 不快として対立的に考える18世紀の道德論・美学^(xx)」が現れていると指摘している。

18世紀はまた社会進化論、文明開化論が生まれた時代でもある。18世紀の植物学者カール・リンネ（1707-78）は『自然の体系』による人類の分類でアフリカ人を次のように分類している。

「アフリカ人 黒い肌、粘着質、筋肉が弛緩。滑らかな肌、サルに似た鼻、膨れ上がった唇。女性の乳房は膨張している。その乳房から豊富な乳がでる。狡猾、怠惰、無頓着。体に油を塗りつける。権威にしたがう。」

このように「科学的に」怠惰な性格と規定されたことは奴隷貿易や植民地支配の正当化に使用された。同時代のアダム・スミス（1723-90）は次のように述べている。

「人間の要旨や顔立ちの美しさについて、それぞれの民族はどんな独自の考えを形成するのだろうか。ギニアの沿岸では肌の色自体が衝撃的なくらい醜い。ここでは分厚い唇と平べったい鼻が美人なのである。」（『道徳感情論』）

4．ヘーゲルにアフリカ認識

4．1　ヘーゲルによるアフリカの分類

フランス啓蒙思想家やその他の哲学者たちは基本的に民主主義者で人間を平等に捉えていると考えられがちであるが果たしてどうだったのか。ルソーはアフリカ人を野蛮人＝自然人として礼讃している。ドイツ観念論哲学者の代表的存在ヘーゲル（1770～1831年）はどうであっただろうか。この章ではヘーゲルのアフリカ認識を詳しくみていく。

ヘーゲルは「世界史は東から西に向かって進む^(xxi)」と考えていたが、「アフリカは歴史的世界には属さず、したがってそこには運動と発展とは見出せない」とまで言い切っている。また「黒人」とは自然状態にある人間とし、「黒人はまったく野望と奔放のうちにある自然人を表している。彼らを正しく理解しようとするならば、あらゆる品位や人倫を捨て、感情を意味するものをすてなければならない。・・・奴隷制度は黒人たちのもとに人間的なものを呼び覚ましたくらいだ」と奴隷制を正当化している^(xxii)。

ヘーゲルによるアフリカ認識を詳しく見ていこう。ヘーゲルはまず、アフリカを三つの部分に分けて考えている。第一はサハラ砂漠の南の地域、第二はサハラ砂漠の北の地中海に面する地帯でヘーゲルはこれらの地域をヨーロッパ化されたアフリカと言っている。第三は、アジアに接するナイル川の流域だとしている。そして「本来のアフリカは、歴史的にさかのぼれるかぎりでは、ほかの世界との交渉をもたない閉鎖地帯」であり、「内部に引きこもった黄金の地、子どもの国」となるのである。その上「歴史にめざめる以前の暗黒の夜に覆われている」としている。ヘーゲルのいう「本来のアフリカ」は第二、第三であげたアジア・ヨーロッパに面する地域ではなく、第一に挙げたサハラ以南の地域である。この地域をヘーゲルは「植物が鬱蒼としげる湿地帯が広がり、あらゆる種類の猛獣や蛇の絶好の生息地」であると考え、「ヨーロッパ人にとっては身の毛のよだつ雰囲気をもった帯域」だと『歴史哲学講義』の中で言い切っている^(xxiii)。

4．2　ヘーゲルによるアフリカ人の特徴

もう少しこのヘーゲルの著作を読み進めてみよう。ヘーゲルは上記のサハラ砂漠以南で出会う人々

について言及している。16世紀、ギニア湾沿いで紛争がおこっているが、その戦争と行軍の最中の振る舞いを抽出して「思慮のない非人間性と胸くそわるくなるような粗暴さをしめしていた^(xxiv)」とし、平時にはであったヨーロッパ人に対してやさしく親切な態度をとったということと比較して対照的で不思議だという。そして黒人の特徴を論じていく。ヘーゲルは「黒人の特徴といえは、その意識がなんらかの確固たる客観性を直視するにいたっていないことが、まさにそれ^(xxv)」だというのだ。そして、人間の意志が関与し、人間の本質を直感させてくれる神や法律が彼らのもとにはないとし「アフリカ人は、個としての自分との区別を認識する以前の、素朴で内閉的な統一のうちにあって、自己とはべつの、自己より高度な絶対の実存については、まったく知るところがない^(xxvi)」と述べている。続けて彼は次のように明言する。

「黒人は自然のままの、まったく野蛮で奔放な人間です。彼らを正確にとらえようと思えば、あらゆる畏敬の念や共同精神や心情的なものをすてさらねばならない。かれらの性格のうちには、人間の心にひびくものがないのです^(xxvii)。

また彼は次のようにも述べている。

「黒人のもので、人間をこえるなにかを示唆するようなものをさがすとすれば、死んだ祖先の力あるものとしてうやまう死者の祭礼があげられます。そこには、死者が崇ったり、あれこれの災厄をもたらすといった、中世の魔女信仰もどきの考えが見られます^(xxviii)。」

ヘーゲルは、黒人は人間が最高の存在として考えているとし、そのように人間が再考の存在とされると、人間は自分自身を尊敬できなくなるという。よって「わがママが絶対の力をふるい、それが著冠できる唯一の確固たる客観性をなすような、そういう段階にある精神はいかなる一般観念も知らない。だから、黒人は人間というものを完全なまでに軽蔑していて、法や共同体のありかたも軽蔑を基本としています^(xxix)」とまで言い切っている。そして、人肉食の話がこの文脈で出てくる。

「人間は、信じられないほど価値のないものとされ、暴虐も不正とは見なされず、人肉を食べることも広く行われている許可事項です。・・・感覚的な黒人にとって、人肉はたんなる肉という感覚的な存在にすぎないのです^(xxx)。」

そのほかの特徴として奴隷制を挙げている。

「黒人はヨーロッパ人の奴隷にされ、アメリカに売られますが、アフリカ現地での運命のほ

うがもっとひさんだといえる。現地には絶対の奴隷制度があって、というのも、奴隷制度の根底は、人間がいまだ自分の自由を意識せず、したがって、価値のない物体におとしめられるところにあるからです。黒人は道徳的感情がまったく希薄で、むしろ全然ないといってよく、両親が子どもを売ったり、反対に子どもが両親を売ったりする。どちらかがどちらかを所有することもできる。奴隷制度の浸透によって、私たちのもつような、道徳的尊敬にもとづく絆はすべて消えうせ、私たちがたがいに要求しあうような敬意を黒人は相手に期待する気がおこらないのです。・・・人間を軽蔑する黒人のあいだでは、死の軽蔑よりも、生が尊重されないところに特徴がある。生を尊重しないゆえに、黒人にはおそるべき蛮勇があって、そのために、ヨーロッパ人とのたたかいでは何千という黒人が射殺される。(xxxii)」

そして、奴隷制が黒人のためになるとして次のようにも述べている。

「・・・かれら（黒人）はただあちこちでキリスト教を最大の感謝をもって受け入れ、かつ彼らが長い間の精神的隷属の後にキリスト教を通して獲得した自由について感動をもって語っただけでなく、ハイチにおいてもまたキリスト教的原理にしたがって国家を建設した。」『精神哲学』

しかし、それは明らかに事実の無視か誤認であろう。ハイチでは1791年8月22日ヴードゥー教の司祭ブックマンをリーダーとする奴隷たちが蜂起している。彼は捕らえられ処刑されてしまうが、彼の遺志を受け継ぐトゥサン・ルヴェルチュールらが指導する武力反乱はフランス本国軍を打ち破り、仏領サンドマングは1804年ハイチとして独立する。他のラテンアメリカ諸国の独立よりも10年以上先行した初の黒人共和国の誕生であった。これを奴隷制による教化と教育の結果であり、喜んで白人を受け容れていたと言えるのであろうか。

フランスの宗教哲学者エルネスト・ルナン（1823-92）は次の言葉はけして奴隷制が黒人のためでも平等のためでもなかったことを表している。

「われわれが目標とするのは平等ではなく、支配である。異人種の国は、農奴、日雇い農夫、工場労働者の国に再び戻すべきである。人間の間の不平等をなくすのではなく、これを拡充し、一つの法たらしめなければならない。」（『知的・道徳的改革』）

ヘーゲルはアフリカの人間の特徴を論じた後に国家の基本的特徴を論じようとするが、アフリカには「社会全体の性格からして国家体制なるものが存在しえないのはあきらか」とし、「全体を支配するのは人間の内面にあるわがままな心」にすぎないともいう。そして、アシャンティやダオメーの慣習

や伝聞の女性が頂点に立つ国家の残虐さを例に挙げ、その理由として「黒人の頭に思い浮かんだことは、どんなことでも全身全霊をかたむけて実行実現され、しかもその実現は、同時に一切の破壊をもたらさずにはいない」と述べ、それは黒人の肉体的狂信に基づくと考えている^(xxxii)。

以上に述べた事柄からヘーゲルは黒人の特徴を「野放図な性格」と断定している。その上で、次のように述べている。

「こうした状態にある黒人は、発展することもなければ文化形成することもなく、過去のこの時点にとってもいまとかかわらない。過去から現在にかけての黒人とヨーロッパ人の唯一の実質的なつながりは、奴隷売買というかたちのつながりなのです。黒人は奴隷制度を不都合なものと思ってないので、奴隷売買と奴隷制度の廃止に最大限の力をかたむけるイギリス人が、黒人から敵としてあつかわれるしまつです。・・・奴隷制度は黒人世界に人間的な活気をあたえているともいえる。^(xxxiii)」

ヘーゲルはけして奴隷制そのものを認めているわけではなかった。ヘーゲルは「人間の本质は自由であると考え奴隷制度はどこからどうみても間違っている」としているのである。それでもなお上述したようヘーゲルは黒人の場合は奴隷制が必要悪であるように描いているのである。ヘーゲルは『歴史哲学講義』の中でアフリカについて以上のように若干の考察をしているが、その最後で次のように記している。

「これをもってアフリカに別れを告げ、以後はもう話題にすることをやめにします。アフリカは世界史に属する地域ではなく、運動も発展も見られないからです。・・・本来の意味でのアフリカは、歴史を欠いた閉鎖的な世界であって、いまだまったく自然状態のままの精神にとらわれ、世界史の敷居のところにおいておくほかないのです。アフリカを歴史の外におしやったところで、いまや世界史の現実の舞台が見えてきます。^(xxxiv)」

つまり、奴隷貿易にしろ植民地支配にしろアフリカを貪り食い超えてきた西洋によりアフリカは世界史の外に追いやられてしまったのだ。

ここまで述べているが彼の考えの裏づけとなっているのはどうも宣教師の報告のようである。ヘーゲルがアフリカ人・黒人の特徴の論拠としてあげているのは「宣教師の幅広い報告がその事実を完全に立証している^(xxxv)」という一文だけである。

4.3 社会進化論とアフリカ

ヘーゲルの生きた時代、沿岸との交流だけでなく宣教師や探検家がアフリカ内陸部に入り込んでい

く。キリスト教宣教師シュバイツァー（1875-1965）は有名だが彼は以下のように言っている。

「原始的種族の土人が高等の学校教育を受けることはそれ自体が不可能なことと私は考える。文化のはじまりここでは知識ではなく、手織りと工作である。・・・黒人は小児である。小児には権威をもって臨まなければ何事もできない。私は、交際の形式を、私の自然に備わる権威を現すようにする必要がある。それゆえ、私は黒人にむかって「わたしはお前の兄弟である」という言葉を教えこんだ。」（『水と原生林のはざままで』）

ナイル川の源流を見つけるためアフリカの内陸を探検したリビングストーンはもともと宣教師であったが「われわれは彼らのもとへ優等人種の一員としてきたのであり、人類のうちで最も墮落した部分を向上させようと欲している政府の奉仕者として来た」と述べている。

ダーウィンの『種の起源』は1859年に刊行されているが、それを人間の社会に適用したのが「社会進化論」である。イギリスの哲学者ハーバート・スペンサー（1820-1903）は「適者生存」「社会淘汰論」「集団内社会進化論」を生み出すが、人類学の父といわれるエドワード・タイラー（1823-1971）は『原始文化』（1871）の中で「概していえば文明人は野蛮人よりも賢明で有能であるばかりでなく、より優れ、より幸福である。未開人はその中間位置する」と述べている。ここでは「野蛮 未開 文明」という文明を最良とする発展の段階を提示している。フランス人ジョセフ・ゴビノー（1816-82）は『人間不平等論』で中でもアーリア人の圧倒的優位を主張している。ゴビノーはアフリカ人の劣等性を直接的に次のように語っている。

「黒色人種は最低であり、人種序列の階段の下に立っている。受胎したときから、動物的な特徴がニグロに刻印され、その知能は常にきわめて狭い枠の中から出ることはないだろう。」

アルフレッド・ミルナーは大英帝国人として「帝国的使命感」「人種的使命感」をもつ必要性を訴えている。そこには「後進民族にすぐれた文明を伝達し、教化向上を図るのが帝国主義的海外膨張であり、白人が人類文明進歩のために背負った重荷＝責務である」という考え方がある。こうして、遅れたアフリカ人を啓蒙するとして自らの行いを見事に正当化するに至ったのである。

このようにアフリカ人＝野蛮、未開人といった言説が確立されたが、ここであげたスペンサーやダーウィンが1880年代にイギリスに留学していた日本人の間で熱心に読まれていたという証言がある^(xxxvi)。当時、これらの留学生を通して今まで論じてきたアフリカに対する言説、認識が輸入されたのは間違いのないだろう。

おわりに

18世紀から19世紀を中心にヨーロッパのアフリカ認識を見てきた。アフリカ=野蛮という言説はアフリカに滞在したヨーロッパ人が繰り返し人種差別的な言説を繰り返すことで常識として作り上げられた。アフリカ滞在者のレポートが哲学者や生物学者によって学問的に仕立て上げられ科学となった。上述したリンネらの成果を受けて、モンテスキューやヒュームといった啓蒙時代の一級の知識人たちがアフリカ=野蛮という言説の仕上げをしたのである。

トリニダード・トバコの初代大統領エリック・ウィリアムズは彼の博士論文を出版した際、次のようにいっている。

「・・・これらの利害関係が生み出した概念は、その関係がなくなった後も長く続き、悪影響を与え続ける。実際には利害関係がないぶん、それは余計やっかいである。その概念とは、白人が熱帯での労働に向かないとか、黒人が劣等であるがゆえに奴隷であることを余儀なくされた、といったことである。われわれは、このような古い偏見だけでなく、同じような本質が常に繰り返し生み出されていることを注視する必要がある。時代とは関係なくである。(xxxvii)」

事実、奴隷貿易や植民地支配といった利害関係がなくなった今でも、アフリカ人=野蛮の言説は蔓延している。日本にもこの概念は輸入され、そして、冒頭に著者の経験を述べたように、日本でもアフリカに対するイメージが再生産されている。

今後は日本におけるアフリカ人=野蛮の言説をいかに覆していくかが日本人として課題であろう。

[注]

- (i) 大阪日仏センター編『西欧・アフリカ・日本』第三書館、1983年。
- (ii) 青木澄夫「明治時代のアフリカ像 文学作品に表れたアフリカと日本人」川端正久編『アフリカと日本』勁草書房、1994年。
- (iii) 戸田真希子「日本人のもつアフリカのイメージ」川端正久編『アフリカと日本』勁草書房、1994年。
- (iv) 辻本卓嗣「日本の新聞に見るアフリカ報道」川端正久編『アフリカと日本』勁草書房、1994年。
- (v) 岡倉登志『「野蛮」の発見 西欧近代のみたアフリカ』講談社、1990年。
- (vi) 上原専禄、上原弘江編『上原専禄著作集 25』評論社、1987年。
- (vii) 青木澄夫『日本人のアフリカ「発見」』山川出版社、2000年。
- (viii) 同上、132 - 133頁。
- (ix) 岡倉登志『西洋の目に映ったアフリカ 黒人差別のイデオロギー』明石出版、1999年、226頁。
- (x) 岡倉登志、北川勝彦『日本 アフリカ交流史 明治期から第二次世界大戦期まで』同文館、1993年、頁。
- (xi) 織田武雄『古地図の世界』講談社、1981年。
- (xii) 岡倉登志『西洋の目に映ったアフリカ 黒人差別のイデオロギー』明石出版、1999年。
- (xiii) ポッカチオによっては「エウローピユ」として14世紀に区別されていた。

- (xiv) Michael Hardt, Antonio Negri, *Empire*, Harvard University Press, 2000, p.115. マイケル・ハート、アントニオ・ネグリ著、水嶋一憲他訳『<帝国>』以文社、2003年、157頁。
- (xv) Andre Gunder Frank, *ReORIENT*, University of California Press, 1998. アンドレ・グンター・フランク『リオリエント アジア時代のグローバル・エコノミー』藤原書店、2000年。
- (xvi) フランク、同上書、465-467頁。
- (xvii) 岡倉、前掲書、39頁。
- (xviii) 松田素二「ヨーロッパの来襲」宮本正興、松田素二編『新書アフリカ史』講談社、1997年、281頁。
- (xix) 著書に『インディオは人間か(アンソロジ - 新世界の挑戦)』岩波書店 1995、『歴史の発見(アンソロジ - 新世界の挑戦)』岩波書店 1994、『インディアス史(大航海時代叢書)』岩波書店 1992、『裁かれるコロンブス(アンソロジ - 新世界の挑戦)』岩波書店 1992 などがある。
- (xx) 岡倉、同上書、48頁。
- (xxi) ヘーゲル『歴史哲学』(ズーアカンブ版全集12巻) *Theorie Werkausgabe. Redaktion Eva Moldenhauer und Karl Marcuel. Werke in zwanzig Banden 12.* Frankfurt, p.123.
- (xxii) 「アフリカ」「黒人」『ヘーゲル事典』弘文堂、1992年。
- (xxiii) ヘーゲル『歴史哲学講義(上)』岩波書店、1994年、157 - 158頁。
- (xxiv) 同上書、159頁。
- (xxv) 同上書、160頁。
- (xxvi) 同上。
- (xxvii) 同上。
- (xxviii) 同上書、162頁。
- (xxix) 同上書、163頁。
- (xxx) 同上。
- (xxxi) 同上書、163 - 164頁。
- (xxxii) 同上書、167頁。
- (xxxiii) 同上書、168頁。
- (xxxiv) 同上書、169頁。
- (xxxv) 同上。
- (xxxvi) 穂積重行『明治一法学者の出発』岩波書店、1988年、205頁。
- (xxxvii) エリック・ウィリアムズ、山本伸監訳『資本主義と奴隷制 経済史から見た奴隷制の発生と崩壊』明石出版、2004年、305頁。